

道草教育



Doshisha Elementary School
同志社小学校

www.doshisha-ele.ed.jp
〒606-0001 京都市左京区岩倉大鷲町89-1
TEL:075-706-7786 FAX:075-712-2312



同志社小学校



道草教育



道草教育について

教育理論には様々なものがあり、しばしばこの教育法こそが効果が高い
というような議論がなされてきました。しかし、それは、時代と共に変わ
り、また、教育の効果というものは、実は容易に検証可能なものではあり
ません。数年、数十年を経ての追跡調査は不可能ですし、一人ひとりの
学びがどのように起こったのか、どれがいったい効果があったのかを明
確に評価するには、他の条件を均一（家庭や環境等）にして比較すること
が必要です。そして、それは不可能であることから、一概にどの教育法が
ベストであるとは言えないのです。しかし、私たちが伝えたい道草教育と
は、教育の方法ではありません。それぞれの学びの力を開き、それぞ
れのよさを生かし、一人ひとりが、人生に向かう姿勢をいかに身に付けて
いくのかという大きな命題に基づくものなのです。ここにあげた、9つの
キーワードから、道草教育の特徴を理解していただければ幸いです。

STEP
2

主体的な学びがもたらすもの

STEP
3

自分らしく未来をひらく人へ

KEY WORD
08

自分らしさを 伸ばす

それぞれが良さを認め合えば
唯一無二である自分の存在を、
自分らしさを大切にできる。

KEY WORD
09

未来へ続く 学び

小学校での学びは
決して小学校で終わるものではない。
そこから始まる未来への
助走となる。

KEY WORD
05

学ぶことを 学ぶ

学ぶ価値を見つけ出し、
感性をみがき、受け身ではなく
自発的に、情熱をもって
学びに向かう。

KEY WORD
06

伝える 喜び

自分の考えていることを
どうやって人に伝えるのか。
わかってもらえた
喜びを感じる。

KEY WORD
07

「考える」から 「わかる」へ

「なぜ」と問いかけ
自分で考え抜き
本当の理解につながる
経験をする。

KEY WORD
02

学校の外も 学びのフィールド

社会に目を向けると
そこにはたくさんの知恵や技術がある。
学びは、決して教室の中にだけ
あるのではない。

KEY WORD
03

仲間と共に 学ぶ

自分だけでは限界があることも
互いの協力で
世界が開ける。
それぞれの良さを生かす。

KEY WORD
04

本物から 学ぶ

さまざまな研究機関とつながり
専門知識と出会い
実際の体験から
学びを深める。

STEP
1

学ぶ力を育てる仕組み

KEY WORD
01

テーマは 自分の興味から

見たい、聞きたい、やってみたい！
一人ひとりの好奇心を
出発点に、とことん探究する
楽しさを味わう。

テーマは自分の興味から



見たい、聞きたい、やってみたい！
一人ひとりの好奇心を出発点に、
とことん探究する楽しさを味わう。

ただ一方的に与えられた課題に取り組むよりも、自分が「もっと見たい!」「もっと聞きたい!」「もっと知りたい!」という姿勢で課題に取り組むことで、子どもたちは、とことん物事を追究する楽しさを感じます。同志社小学校が大切にしているのは、子どもたちの気づきと疑問です。本校では、実体験を通して、におい、音、手触り、見た目の不思議さなどを、ありとあらゆる感覚を使って感じたり、そこから想像したりすることを大切にしています。そして、そこから生まれた疑問をもとに学習活動がスタートすると、子どもたちは、教師が少しサポートするだけで、意欲的にどんどん学んでいくようになります。このように、一人ひとりが持つ好奇心を出発点として、たくさんの気づきをしながら、次々と頭に浮かぶ疑問を解決していく過程で、「学ぶ力」が育ちます。

PICK UP!

1年生 道草の授業

春の植物や生き物を探しに、「春見つけ」へ出かけた宝ヶ池公園でのこと。子どもたちは、鹿のフンの下にピカピカ光る虫を発見しました。「なんか、カナブンみたいやな!」「ちょっとカブトムシにも似ているわ。」という声が上がります。学校に帰ってきて、さっそく子どもたちは夢中で図鑑をめくり、同じ虫を探します。そして…「あったぞ!」「先生、見つけた!」「えっ、何ページ何ページ?」その虫は、オオセンチコガネという虫であることが分かりました。

でも、その後、子どもたちからはたくさんの疑問が生まれます。「何を食べているのかな。」「背中がピカピカ光っているのはどうして。」「名前も不思議だな。」子どもたちは、オオセンチコガネのことが知りたくて知りたくて仕方のない様子です。

その疑問や、出合った気づきをもとに、クラスみんなで確かめ、解決していきました。好奇心や興味関心をもとに学習を進めることで、子どもたちは、「学ぶことは楽しい」と感じたり、研究の面白さを味わったりすることができました。



学校の外も 学びのフィールド



6年生 修学旅行



5年生 北海道

4年生 安中・富士



3年生 ハチ高原

2年生 野外体験活動(京都府下)

社会に目を向けると
そこにはたくさんの知恵や技術がある。
学びは、決して教室の中にだけあるのではない。

本校では、体験を通じて学ぶことを大切にしています。自分で実際に見て、心が動かされた瞬間、実感を伴った深い理解を得るだけでなく、様々なことへの興味・関心をかきたてることが出来ます。

1年生から6年生までの6年間、学年を追うごとに泊数を増やし、毎年宿泊体験学習を行っています。低学年では、学校や野外での様々な体験を通して集団で生活することの難しさと楽しさを学びます。高学年からは、その土地でしかできない体験をしたり、校祖新島襄の足跡を辿る中で新島の思いについて考えたりする機会を設けています。4年生では、安中にある新島の家へ、5年生では、新島が海外へと旅立った函館へ、6年生では、新島が学んだアーモスト大学へ行きます。実際に行って、見て、聞いて、体験して、感じることを大切に、広い視野で物事を見ることのできる子どもを育てていきます。

PICK UP!

各学年での豊富な宿泊体験行事

宿泊の体験と内容から、毎年泊数を増やし、発達に応じたプログラムを考慮しています。

1年生(1泊2日)	学校合宿
2年生(1泊2日)	野外体験活動(京都府下施設)
3年生(2泊3日)	野外体験活動(兵庫県ハチ高原)
4年生(3泊4日)	安中・富士
5年生(4泊5日)	長沼町・函館(北海道)
6年生(8泊10日)	修学旅行(アーモスト・ボストン)



1年生 学校合宿

仲間と共に学ぶ



自分だけでは限界があることも 互いの協力で世界が開ける。 それぞれの良さを生かす。

授業を通して、自分一人ではたどり着くことができなかったであろう学びができたとき、子どもたちは学ぶことを「楽しい!」と感じるのではないのでしょうか。

授業では、子どもたちは、自由に自分の考えを発信することができ、自分の思いを語ることができます。また、友達の話したことがわからないなら質問すればいいし、発言の途中で困っている友達がいたら代わりに話す人がいてもいいのです。はじめから正しい答えを出す必要はなく、一人ひとりが持っている知恵を持ち寄って、「伝えたい」気持ちと「聴きたい」気持ちをぶつけ合いながら、様々な考えを吟味し、洗練させ、より深い考えに練り上げていく過程は真剣そのもの。その過程に、自分とは異なる仲間の考えがあるからこそ、「自分の考えはこれで本当にいいのか」と自己に問いかける子どもの姿を生み出します。その過程や子どもの姿こそ、「道草教育」で大切にしているもののなのです。

PICK UP!

「教科を越えた学び」

～2年生の道草と国語での取り組み～

2年生の道草では、6月末にサツマイモの苗を植えました。大切にお世話を続け、11月になり、やっとサツマイモの収穫をしました。たくさんとれたおいもを一体どうしようか…子どもたちは話し合った結果、「1年生を招待して、サツマイモパーティーを開こう!」と決めました。1年生に喜んでもらうために、サツマイモについて調べ、1年生に出すクイズを作りました。また、実際にサツマイモを使ったお菓子を作り、おもてなしする計画も立てました。家庭科の先生に教えてもらいながら、サツマイモの調理をしました。ここで、国語との横断的な学びの場を作りました。同時期に、国語では、「しかけカードの作り方」という単元で、ものを作るための説明文の書き方を学びました。「材料」は箇条書きで書くこと、「作り方」は作業の手順だけでなく、よりうまく作るためのコツなども添えることなどを学びました。そこで、実際に自分たちが作ったおいものお菓子の作り方を、説明文に書くことにしました。その「道草での体験」と、「国語での学習」を連携させ、子どもたちにとって必然的な取り組みになるような働きかけを大切に、子どもたちの学びがより深くなるよう、教科を横断的に捉えた単元作りをしています。





災害救助犬を招いて



土井志ば漬け本舗 大原工場

大学生とフォーミュラカーを題材に

さまざまな研究機関とつながり 専門知識と出会い 実際の体験から学びを深める。

本校では、専門家の方から学ぶことや社会とつながる学びを大切にしています。理科「昆虫」の学習では、単元の学習を終えた後に、長年、蝶の研究をされている方に学校に来ていただき、「オオムラサキ」の生態や羽化の仕方について、詳しくお話を聞いたり、蝶の標本を見せていただいたりする機会を設けています。

また、社会科「工場で作られるもの」の学習では、京都の土産ランキングナンバーワンの漬物に注目し、「誰でも食べられる漬物を工場でたくさん作るにはどのような工夫があるのだろう」という課題を持って学習を進めていきました。その中で、子どもたちからの「実際に行ってみないとわからない。」という声をもとに、土井志ば漬け本舗に見学に行き、工場ではどのような工夫がされているのか学びました。工場の中は、独特のにおい。樽の上に

はたくさんの大きな石。「こんな暑い所で働く人々は頑張っているんだなあ。」という気づきがありました。実際に働いている人の姿を見たり、インタビューしたりすることで、目には見えにくい人の思いにも気付くことができます。また、「昔を伝えるもの」の学習では、岩倉の歴史保存会の方から昔の暮らしについて話を聞いたり、石座神社奉賛会の方から地域の祭りである「岩倉火祭り」について話を聞いたりする機会を設けています。

社会科以外にも「言葉で伝える楽しさを味わう」と題して、読売テレビのアナウンサーと一緒に朗読の練習をする機会がありました。プロの方が、一生懸命表現していらっしゃる姿を見て、言葉の大切さを学ぶことができました。専門家の力とそこから学ぼうとする子どもたちの吸収力が一体となった特別授業はわくわくする時間です。教科書からは学ぶことのできない新しい世界を知ると共に、子どもたちの新たな興味・関心を引き出します。



読売テレビのアナウンサーと学ぶ



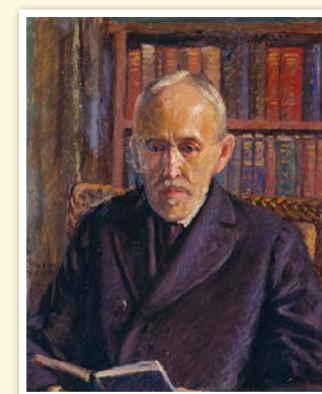
学ぶ価値を見つけ出し、感性をみがき、
受け身ではなく、自発的に、
情熱をもって学びに向かう。

教育学の世界では、learning to learn（学び方を学ぶ）ということがよく言われます。学ぶ方法には多くの道があり、そして、達成していくために効率が良い方法もあるのかもしれませんが。しかし、大切なのは、自分に合った学びのスタイルを確立していくことなのです。学びとは、本来面白いものです。新しいことを知ったり、身に付けたりする時の子どもたちの表情には、多くのエネルギーが見て取れます。そして、学びに対してのアプローチは、極めて個人的なものではあるのですが、大切なことは、自分なりの学び方を身に付けていけるかどうかにかかっているのです。ある物事を学ぶということが、全く違う分野の他の事柄を学ぶことにつながっていくということです。小学校段階で、そのような学び方を身に付けていくこと、それは、実は、さまざまな学びを経験していくなかで、自然に身に付いていくものなのです。学び方さえ、身に付けることができれば、与えられたものをこなすのではなく、自らが問いを発し、答えを探究することができます。そのような学びの力を得ることが、「道草」をする意義なのです。

COLUMN

Learn to live and live to learn.
「生きるために学び、学ぶために生きよ。」

同志社小学校の3つのクラスの名称の一つにL(Learned)部があります。発音は、learnの過去形がラードとなるのに対して、形容詞としての発音ラーネッドとなります。Learnedは、同志社の黎明期の教員の名から取られているのですが、「学識のある」という意味にふさわしく、彼はあらゆる分野に通じ、どの科目でも教えることができたそうです。元々は、同志社の源流であるキリスト教プロテスタント会衆派アメリカンボードの宣教師として来日し、新島襄を助け、約50年間同志社教育に関与しました。専門の聖書は元より、数学、物理学、天文学、経済学などの講義を担当し、多くの影響を学生に与えたと言われています。さまざまな分野の基礎的な学びであるリベラルアーツ教育を実践し、冒頭に掲げた、Learn to live and live to learn.「生きるために学び、学ぶために生きよ。」との生涯教育の大切さを説く言葉を遺しました。



Dwight W. Learned
ドワイト・ウィットニー・ラーネッド
(1848～1943)
同志社大学の基礎をつくった人物



自分の考えていることを どうやって人に伝えるのか。 わかってもらえた喜びを感じる。

「伝える」ことに喜びを感じますか。伝えたいことや、伝えなければいけないことがあれば、「伝える」のはごく当たり前のことで、改めてそこに『喜び』を感じるといったことは少ないかもしれません。ですが、その当たり前と感じている「伝える」行為の中には、多くの克服すべき課題があり、また「伝える」ことで、充足される様々な思いがあります。課題で言えば、伝える相手が一人なのか、数人なのか、大勢なのか、さらに自分とどのような関係の人なのかということも「伝える」上では、大きな課題となります。さらに、「伝える」場が、談話的な場なのか、目的をもった議論の場なのか、連絡・報告的な場なのか、自分の考えを公にするスピーチの場なのか…、といったことも重要です。時には、言語文化が違う人たちに「伝える」場面だってあります。そうした様々な状況の中で、自分の思いを、考えを、伝えなければいけないことを、相手の立場に立って正しく「伝える」ことは、決して容易なことではありません。誰かに何かを「伝える」ということ。「伝える」場が広がるということ。それは、決して当たり前のこ

ではなく、良質で多様な学びが作り上げる子どもたちの成長の証です。

そんな良質で多様な学びの場を「道草教育」は追いつめています。

学びの主役は子どもたちです。では、授業の中で、子どもたちが主役となって活躍しているとは、どんな姿なのでしょう。きっと、生き生きと自分の思いや考えを「伝える」子どもの姿が思い浮かぶのではないのでしょうか。ですが、その「伝える」ということは、先にも述べたように決して容易なことではありません。(間違えたらどうしよう)(恥ずかしい)(何をどう言っているのかわからない)…など、そこには多くの障壁があります。(わからない)を「わからない。」と伝えることさえ、至難のことです。でも、そんな「わからない。」を伝えてみるとどうでしょう。必ず誰かの「伝える」が返ってきます。その誰かの「伝える」を補う「伝える」も生まれてくることでしょう。誰かの「わからない。」が起点となって、子どもたちの学びが展開していくのです。わからない友だちに「伝える」友だちも主役かもしれませんが、「わからない。」を伝えた友だちもまた、素晴らしい学びの主役です。私たちは、そんな子どもたちの「伝える」に寄り添い、大切にしたい授業づくりを進めています。

こうした学びの中で、子どもたちは「伝える」ことの喜びを増幅させていくのです。同時に、「伝える」喜びを実感した子どもたちは、伝えられるすべてのことを大切に良き聞き手となり、友だちと、人と、そして言語文化のちがう友だちとも心を通わせる素地を育てているのです。





「なぜ」と問いかけ 自分で考え抜き 本当の理解につながる経験をする。

日常、私たちは“考える”ことを止めることができません。「帰って何しよう…。」「今日は何着よう…。」「怒られないように…。」「このゲームをクリアするには…。」…と年がら年中何らかのことを考えています。もちろん学びの場である授業であればなおさらの事、子どもたちは頭を目一杯使って考えている…かという、もしかするとそうではないかもしれません。もちろん活動している限り、何かを考えていることでしょう。ですが、授業とは全く関係のないゲームのことを考えているのかもしれません。“考える”ことは、考える対象が、その子にとって必然性のある物事であるといった場合がほとんどです。授業における学びの対象は、そうした意味では子どもの必然に位置するものではありません。それらを子どもたちにとって必然とするには、その深みやおもしろさを知り、子どもたちの知的欲求を引き出す教師の働きかけが必要なのです。

また、“考える”ことも“わかる”ことも、共に知的活動のように思えます。それはそうなのですが、

例えば、こんな“考える”はどうでしょう。お腹を空かしている一人の子がいたとします。それに気づいたある子は、「食べ物もっているし、私はお腹がいっぱいだから…」と考え、ある子は、「もっている食べ物は、ぼくの嫌いなものだから…」と考えて、お腹を空かしている子に何か食べ物を分け与えました。どちらも“考える”ことから、表面的には同じ優しい行為をしたことになります。この二人は、（お腹を空かして困っている子がいたら、食べ物を分かち合うことが望ましい行為だ。）ということはわかっているのかもしれませんが。そして考え行動しました。ですが、二人の“考える”には、何か引っ掛るものはありませんか。わかっていることも薄っぺらく感じませんか。

“考える”ことは、知的活動かもしれませんが、その根っことなる心が間違っていると、時にその考えが凶器となることもあります。わかっている知識も然り。今では、わかっていることなら、AIの方がはるかに多くの知識を保有しているでしょう。大切なのは、どこを心根として“考える”か、ということです。道草教育の根っこは、『良心』です。（わからないことをわかりたい）という知的欲求を原動力に、『良心』を根っことして“考える”。その考えは、また次のわからないを生み出します。子どもたちの知的欲求を刺激し続け、尽きることのない“わかる（…）”に向けて探求し続ける姿勢を育む。それが道草教育です。



自分らしさを伸ばす



6年生 学年で取り組む宗教劇
アルタバン物語～四人目の博士



同志社プレゼンテーション大会



清掃をたてわり活動で



それぞれが良さを認め合えば 唯一無二である自分の存在を、 自分らしさを大切にできる。

一人で答えを導き出せる問いもあるでしょう。しかし、人と協力して初めて見つけ出し、答えに至るものもあります。それぞれの感じ方や思いを出し合い、他者の意見をしっかりと聞く、それは、決して自分の個性を殺してしまうことではありません。異なる意見を聞いて、消化し、それを自分の意見と比べ、すりあわせ、さらに自分の思考が形成されていく。そのような経験は、多くの仕事の中でも見られるものでしょう。一つの目的に向かって、チームで取り組み、よりよい解決策へと合意していくプロセス、それは同時に、自らの個性が違う形で生かされることでもあります。そのように、お互いの良さをどのように生かしていくのかという視点からすれば、グループでの活動は、さらにそれぞれの個性を認め合うことにつながっていくのです。自分だけにしかできない、個性の発見も、他者との協力から可能になることがあるのです。

COLUMN

「一人ひとりの思いを大切にする学級活動」 ～朝の会の様子～

子どもたち一人ひとりの思いを大切にする時間は、授業ではありません。朝の会も、その一つです。

礼拝が終わると、その日の日直が自ら前に立ち、朝の会を始めます。あいさつと健康観察を終えると、その日クラスで取り組む「めあて」を決めます。その日一日を通して取り組む「めあて」です。今の自分たちの課題をしっかりとらえ、みんなが納得して実行できる内容でないといけません。その場面では、教師は助言をしたり司会をしたりはしません。日直の司会進行のもと、子どもたちだけで話し合います。子どもたちはそれぞれの思いを持ってその場に臨み、意見を出します。その一人ひとりの思いを大切につなぎ合わせて、最終的に日直が「めあて」を決定します。

自分の思いが認められ、実現されるその喜びこそ、「自分らしさを伸ばす」原動力となるはずです。





小学校での学びは決して 小学校で終わるものではない。 そこから始まる未来への助走となる。

すぐに結果の出るものは、効果がたちまちなくなると言われます。意味がわからないものをただ暗記しても、すぐ忘れてしまうということは大人も経験することでしょう。小学校段階での学びでは、目先の成果や点数を求める必要は全くありません。むしろ、学びの根っことなる、広く総合的な学びの力を身に付けることにより、将来に学ぶことになるさらに高度な、より実践的な学びでも力を発揮することができます。つまり、小学校の間に、基本的な問いに対して、短絡的に答えるのではなく、自分なりにしっかりと深く考え、なぜ、そうなるのかを突き詰めることによって、理解力が増していくのです。そのような力があれば、「21世紀型の学力」と呼ばれている力も、言うまでもなく身に付けることができるでしょう。そして、学びという、一人ひとりが人生を切り開いていく力となるものは、種まきの段階からかなり時間を経た時に芽を出し、実を結ぶものでもあるのです。それこそが、回り道をしているかもしれないけれども、目的地にたどり着く過程で大切な「道草」の意義なのです。



■ 中嶋 琴音 / 同志社中学校在学中

中嶋琴音さんは、中学2年生の夏、9カ国から同じ年齢の子供たちが集まり、一ヶ月間ドイツで共同生活を送るプログラムに参加しました。様々な背景を持ち、文化や考え方が異なる者同士が、環境やLGBTなど様々なテーマについてディスカッションする経験を通じて、たくさんの刺激を受けました。自分で興味があるものを見つけ、進んで参加する。その原動力になったのは、小学校の時の経験だと語ります。音楽のワークショップやホームステイ受け入れの経験、また留学生との関わりなどを通して、自分の心の壁が取り払われ、6年生の時に始まったオーストラリアへのプログラムに応募し、3週間、一人でホームステイし、現地の学校で生活しました。また、宗教委員長として、重度障害者施設、止揚学園を訪ねた折にも、国際的な交流と同様、一人ひとりを同じ存在として受け入れる大切さを感じたそうです。人に何かを伝えることの喜びと難しさを経験した上で、海外での生活にも興味を持ち、現在は英語の学習をはじめとして、様々なことに自主的に取り組む姿勢がさらに培われています。



■ 松井 瞳 / 同志社高等学校在学中

松井瞳さんは、東京で行われている中高生のためのMono-Coto Innovationというコンテストに単身で参加しています。「プロと実際に本物のモノづくりをする」という企画で、参加者200人から無作為で選ばれた4人組の50チーム、その中でファイナリストとしての5チームの中に選ばれました。全く知らない人の中に飛び込み、このプロジェクトに関わっています。この行動力と発想はどこから得たのかを話してくれました。松井さんの根本にあるのは、自分の好きなことを見つけ、そしていつもわくわくしていたいという思いです。何事に取り組むにしても、それを自分なりに楽しめるものに変えていくことの大切さ、それは、自分が今まで好きなものを見つけようとする過程に自然と肯定的な評価をもらってきた、小学校での経験が大きかったと振り返っています。中学校では、生徒会の執行委員として、自分が楽しむことと、みんなと一緒に学校生活を楽しむことを心がけ、高校では、先ほどのプロジェクトの他にも、祇園祭のゴミを減らすボランティアにも学校の仲間と応募しました。また、自分でイベントを立ち上げたり、高校生が専門家に質問しながら働くことについて考えるラジオ番組にも出演したり、学校外でも様々な人に出会うことを大切にしています。常に変化を求めつつ、自分が生かされる場はどこなのか、自分にしかできないこと、使命とは何なのかを探しながら、自分がわくわくする多くのことに取り組んでいます。



■ 島山 雅広 (左) / 同志社大学商学部在学中
■ 永濱 智也 (右) / 京都大学工学部工業化学科在学中

島山雅広さんと永濱智也さんは同級生で、同志社小中高と一緒に過ごしてきました。小学校時代からのことを振り返ると、まず、「学びがとても楽しかった。」と口を揃えて言ってくれました。何かができる時に、肯定的な評価をもらい、また楽しく取り組むことができる。それがうまく循環していき、学ぶことが楽しいという思いをずっと持ち続けることができたようです。

また、ポスターセッションを初めとして、何度もプレゼンテーションをする機会があったことがとても大きかったと振り返っています。どのように発表することが効果的なのか、人の発表を見て改善し、思いが伝わる発表をするために、リサーチし、整理し、しっかりとした内容のものを、みんなの顔を見ながら語りかけることに慣れていきました。中高時代は、常に、プレゼンテーションの能力には高い評価を受けていました。また、縦割り活動の経験を通して、どうしたら、人が気持ちよく動いてくれるのかについて学ぶことができ、中高の生徒会活動やクラブ活動でも、そういったことが自然に考えられるようになったことも小学校での経験が活かされていると語ってくれました。そして、小中高を通して、常にやりたいことを見つけ、それができる環境にあったことも幸せなことだったと振り返っています。

だから、大学に入学しても、学びへの興味や関心はますます広がっていき、島山さんは公認会計士の資格取得を目指しつつ、資格取得がゴールなのではなく、そこから何をするかを考えながら学校生活を送っています。

また、永濱さんは、2019年ノーベル化学賞受賞の吉野彰氏が出身の京都大学工学部工業化学科に入学し、もともと抱いていた化学への興味が、さまざまな分野に広がっていることを感じています。

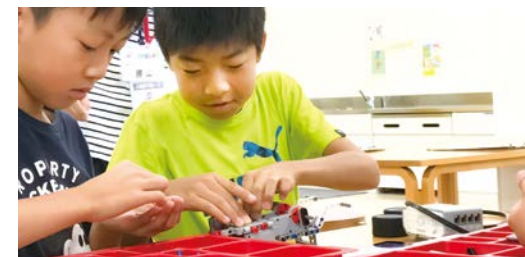
この四名に共通するのは、現在の関心事や将来への道のりが、小学校からの学びの延長線上にあり、その姿勢にぶれがないことです。常に変化するこの時代だからこそ、それぞれの持つ自主的で自由な精神が生かされる場面がさらに増えていくことでしょう。

ICTと 道草教育



道草教育とプログラミング学習

同志社小学校の道草教育は9つのキーワードが示すように、子どもたちが主体的に社会に関わり、良心のもとに価値判断できる人になるための素地を耕しています。新島襄が一人の学生に宛てた手紙の中に、「良心の全身に充満したる丈夫の起り来らん事を」という一節があり、それはまさに道草教育の目指すところです。2020年度より必修化となるプログラミング学習もまた、この道草教育の中にあると考えています。タブレットやロボットを使って、くらしに役立つ様々な製品がプログラミングによって動いていることを学習したり、そのコードを順序立てて指令を出す活動をしたりしています。しかし、正確に動かす技術や論理的な思考を学んでも、それを使う人の根底に良心がなければそのロボットはどのようなものになるのでしょうか。たちまち社会を脅かすものとなることは容易に想像できます。また、子どもたちがプログラミングのコードを組むと必ずと言っていいほど失敗を経験します。その失敗



の原因が何なのかを見つけ出し、正しいコードを探し、入力し、正確に動くように再構築する過程こそがプログラミング的思考を育みます。タブレットやロボットだけでなく、日々の生活の中でも子どもたちが知的好奇心を原動力に主体的に原因を調べ、探求するという過程もプログラミング学習であると考えています。そして、この「良心」と「主体的な活動」をもとにしたプログラミング的思考こそが同志社小学校が目指す「道草教育的プログラミング的思考」なのです。

